

博士論文要旨
Abstract of Doctoral Dissertation

『竹取物語』の詩学
『竹取物語』から「かぐや姫」へ

The Poetics of *Taketori Monogatari* :
from *Taketori Monogatari* to *Kaguyahime*

国際基督教大学 大学院
アーツ・サイエンス研究科

Presented to
International Christian University
Graduate School of Arts and Sciences

2018年3月20日
March 20, 2018

斉藤 みか
SAITO, Mika

序章

『竹取物語』は源氏物語において「物語の出で来はじめの祖」とされているように、日本の物語の出発点である。それは、成立時期が現存するものの中で最も古いということだけを意味するわけではない。『竹取物語』は日本における物語、虚構の始まりである。『源氏物語』が成立した時点で、そういう位置づけにあった物語作品なのである。

同時に昔話「かぐや姫」として現代人であっても誰もが聞いたことのある物語でもある。更に、国語教育において古典教材として、中学校の教科書に必ず採録されているため、冒頭部分などの原文にも多くの人が触れたことがある作品である。

しかし、それほど身近であるにも関わらず、あるいは身近であるからこそ、『竹取物語』の虚構の原点としての意義は現代において十分に認識されていない。現代の「かぐや姫」は大半が子ども向けの短いものであり、『竹取物語』の主題を欠いているものがほとんどである。子ども向けとは限らない映画なども、やはり原作『竹取物語』の主題は見られないものが多い。

筆者もまた『竹取物語』を知っている気になっていた日本人の一人であった。中学・高校の国語教育の中で原文の一部を読み、冒頭部分は暗記していたし、プロットも知っていると思っていた。しかし、『竹取物語』の主題は知っていると思っていたものとは全く違うものであった。また、『竹取物語』の表現の特徴についても、知識は何一つなかった。よく知っていると思っていた『竹取物語』について、実は何も知らなかったのである。これが、大半の現代日本人の状況であろう。

本論文では、日本における物語、フィクションの始まりである『竹取物語』の意義を確認し、現代人にとっての役割を改めて考える。そして、この物語がどのように受け継がれてきたか、受容の歴史をたどり、現代における受容の実態と現代人にとっての『竹取物語』の意義について考える。第一章では表現の面から、第二章では内容の面から、『竹取物語』の物

語の出発点としての意義について考察する。第三章以降は受容の歴史をたどる。まず第三章では文字テキストの中の『竹取物語』受容について確認し、第四章では奈良絵本・絵巻を中心に、絵画表現を通して江戸時代の受容について考察する。最後に、第五章では現代における受容の実態と今後の可能性について述べる。

第一章

第一章では、物語の出発点とされる『竹取物語』の意義について、表現の面から考察する。第一節では、かな文字と虚構との関係について述べる。まず、先行研究を踏まえながらかな文字が虚構を可能にしたことについて確認する。次に、『竹取物語』においてかな文字の表現力がよく現れている具体的な例として、物語に登場する語源譚を取り上げる。『風土記』などに見られる語源譚などとも比較をし、『竹取物語』がかな文字の表現力を活かした虚構のレベルの高いテキストであることを確認する。最後に、かな文字の表現力についてツベタナ・クリステワの先行研究を踏まえて更に詳しく考察する。かな文字による表現により、『竹取物語』がいかに虚構のレベルが高い作品であるか、自らの虚構性に自覚的であるかについて考察し、『竹取物語』が虚構のメカニズムを明らかにしている点で重要な作品であると結論付ける。

第二節では、引き続き『竹取物語』の虚構性について考えるために、『竹取物語』の虚構内虚構について取り上げる。『竹取物語』には、登場人物の一人である車持皇子が実際には行っていない蓬莱山に行ってきたという話を披露する場面がある。この場面は、読者にはそれが皇子の作り話であることが予め知らされる。一方、かぐや姫や翁はそれを知らず、だまされかけるのである。まず、この車持皇子の冒険譚について表現上の特徴などについて確認する。そして、同じく登場人物による嘘の語りが出てくる西洋古典『オデュッセイア』と比較する。まず主人公オデュッセウスによる5つの嘘の語りについて、その特徴をまとめる。そして、車持皇子とオデュッセウスの嘘の語りを比較し、その特徴について考察するために、

「そらごと」と「いつはり」という二つの言葉に着目する。どちらも、現代語では「嘘」と訳される言葉であるが、その差異から『竹取物語』における虚構内虚構の特徴について考察する。策略として語られるオデュッセウスの嘘の生い立ちは、真実を覆い隠し目的を達成するための「いつはり」であるのに対して、車持皇子の冒険譚は全く実態のない絵空事、「そらごと」であると考えられる。しかし、オデュッセイアが最後に父に語る嘘の生い立ちは、すでに求婚者たちを撃退した後に語られ、策略の一つではなくまるで虚構を楽しむようである。『竹取物語』と『オデュッセイア』は、一方はかな文字で書かれた物語であり、他方は口承の叙事詩である。表現方法は異なるが、共に書くこと、語ることは虚構の可能性を内包するということを自覚した作品であるといえよう。

続く第三節では、物語の中の和歌に着目する。まず、散文である物語と韻文である和歌との関係について述べる。次に、『竹取物語』に登場する和歌を具体的に見ていき、従来の解釈をまとめ、第一節で述べたかな文字の表現力を踏まえて和歌の再解釈を試みる。先行研究においては取り上げられていない解釈の可能性を提示する。最後に、物語の中の和歌の役割について考察する。例えば、表面的な、実態的な意味としては問題がない歌が、詩的言語として解釈した場合に正反対の意味になり、結果的に滑稽な歌としても成立することが『竹取物語』の和歌からわかる。物語中にこうした和歌があらわれることで、テキストの層はあつくなる。また、登場人物が一方の意味にしか気づいていないのに対して、教養のある読者は他方の意味に気づき、滑稽だと笑うことができる。こうした意味において、物語中の和歌は読者の参加の可能性を保証するものであるといえることができる。

第二章

第二章では、『竹取物語』の内容・主題に視線をうつし、最古の生死論としての『竹取物語』の意義について述べる。第一節ではまず、前提として、文学と思想との関係について述べる。日本には哲学者や思想家がいなかったと言われることがあるが、古代人にとっては文学が

哲学のメディアでもあったということを確認する。そして、日本古典文学のメタ詩的機能について、ロマン・ヤコブソンの理論を用いながら考察する。

第二節では、『竹取物語』の主題について考えるにあたって重要である羽衣に着目する。『竹取物語』に登場する羽衣の役割や独自性について考えるために、まず他の羽衣説話について内容を確認し、『竹取物語』と比較する。次に、『竹取物語』における羽衣と神仙思想との関係について述べる。月の人と仙人には共通点もあるが、不老不死で美しいが人間の心がない、という月の人の特徴は、『竹取物語』独自のものであることが比較から見えてくる。最後に、浄土教の影響についても考察し、かぐや姫の昇天が死のメタファーである可能性も指摘する。

『竹取物語』の主題について考えるために、続く第三節ではチベットの説話「斑竹姑娘」と『竹取物語』との比較を行う。「斑竹姑娘」は、『金玉鳳凰』というチベットの説話集に採録されている説話で、『竹取物語』と求婚譚などが細部まで似ていることで注目される。まず、「斑竹姑娘」がどのような説話であるか確認し、『竹取物語』との共通点・相違点について考察する。特に、かぐや姫と、それにあたる竹姫とを比較して、どのような差異があるか確認する。また、細部まで似ているとされる求婚譚についても比較をし、どのような相違点があり、それがそれぞれの物語・説話の主題とどう関連するのかについてみていく。難題の品や取り組み方が似ているとされる両作品の求婚譚であるが、求婚者の役割は大きく異なる。「斑竹姑娘」の求婚譚は、竹姫が主人公ランパと結婚するためにその障壁となる五人の求婚を断るためのものであり、『竹取物語』の求婚譚は月の人であるかぐや姫が結婚自体を拒否するためのものである。「斑竹姑娘」に登場する五人の求婚者が一貫して悪役として描かれるのに対して、『竹取物語』の求婚者は難題への取り組み方が次第に誠実になり、かぐや姫が心を獲得するためのモデルとなっているといえよう。

最後に第四節では、生死論としての『竹取物語』の意義について述べる。まず、『竹取物語』の主題に関して、先行研究を踏まえて、どのような議論がこれまでにあったのかまとめ

る。求婚譚と、その他のかぐや姫の生い立ちと昇天の部分とのどちらかに主題を見出すのではなく、物語を通してかぐや姫の心の獲得の過程が描かれることを指摘し、心の獲得と喪失というテーマを見出す。主題についての考察を踏まえて、最後に『竹取物語』を最古の生死論ととらえ直す。『竹取物語』は心をもつということを人間の最大の特徴であるとしている。月に戻るために、かぐや姫は心を失わなければならない。その結果、地上に残る翁・嫗・帝とかぐや姫との間には心の断絶が生まれ、この断絶は死のメタファーとも解釈できる。不老不死の月の人に対して、人間が老いて死ぬこと理由は、心を持っているからであるという解釈も、『竹取物語』は示唆している。こうした意味においても、『竹取物語』を日本最古の生死論としてとらえることができる。

第三章

第一章・第二章で、表現と内容の両面から、『竹取物語』がいかにか「物語の出で来はじめの祖」であるかを確認し、続く第三章からは、『竹取物語』がいかにか受け継がれてきたのか、その受容について考えていく。第三章では、まず他の文学作品の中で『竹取物語』がどのように言及されているかについて述べる。『源氏物語』前後までの物語文学における「八月十五夜」に着目し、『竹取物語』の影響について確認する。この時期の物語文学において、八月十五夜に言及される際に、多くの場合『竹取物語』の影響が見られることを指摘する。そして、表面的な言及・引用ではなく『竹取物語』の思想や主題まで踏まえた受容の例として、『源氏物語』における『竹取物語』受容について詳しく述べる。『源氏物語』においては、紫上の死とかぐや姫の昇天が重ねられている他、桐壺更衣のエピソードに関しても、死の前後の帝の様子などに『竹取物語』の影響を見てとることができる。「限りなし」の美と命を持つかぐや姫に対して、桐壺巻には「かぎり」という言葉が度々登場する。『竹取物語』が限りなしの月の人を描いて人間を相対化したのに対して、『源氏物語』は限りある人間世界を描いているといえよう。『源氏物語』における『竹取物語』受容は表面的な類似性や引用

に留まらない。

最後に、『源氏物語』以降の物語文学の中の『竹取物語』受容についてまとめる。『源氏物語』以降の物語では、女性の主人公や登場人物がかぐや姫と重ねられる例が多く、『竹取物語』そのものというよりかぐや姫の影響が強い。限りなしのかぐや姫に対して、『源氏物語』は限りある人間世界を描き、『源氏物語』以降の物語もやはり人間世界の物語なのである。人間の中にかぐや姫の要素を取り込むこれらの物語は、それぞれに新しいキャラクターを造り出していると言える。

続く第二節では物語文学から説話の世界に目を向けたい。中世には『竹取物語』の系譜であると考えられる説話（所謂「竹取説話」）が多数見られる。まず、その中でも最も古く、『竹取物語』との共通点も多い『今昔物語集』の中の説話について述べる。次に、『海道記』など他の竹取説話について、その内容をまとめる。最後に、竹取説話の特徴について考察する。説話においては、かぐや姫が鶯の卵から誕生するケースが少なくない。また、帝が登場する場合が多く、併せて富士山も頻繁に登場する。「竹取説話」は「かぐや姫」という名称や、竹取の翁が出てくる点で『竹取物語』の影響下にあるのであるが、一方で帝の求婚を拒否せず、后になってから別れるものや、一緒に岩窟に入るものなど、『竹取物語』とは異なる展開になるものがほとんどである。『竹取物語』はそのままの形で受け継がれていくのと同時に、説話の世界においては少しずつ姿を変えつつ受け継がれていったことがわかる。

第四章

第四章では、『竹取物語』の奈良絵本・絵巻に着目し、江戸時代における『竹取物語』の受容について絵画表現を通して見ていく。第一節ではまず、奈良絵本・絵巻とはどのようなものかということ、また『竹取物語』の奈良絵本・絵巻の状況などについて述べる。『竹取物語』の絵巻は物語成立直後から作られていたと考えられるが、古いものは残っていない。室町時代末期から江戸時代にかけて大量に作られた奈良絵本・絵巻というジャンルでは、

『竹取物語』の絵巻・絵本も数多く残っている。海外に所蔵されているものも含めると、『竹取物語』の絵巻・絵本は五十余点あるとされている。本論文では、全図を確認することができたものを中心に、絵巻十五点、絵本十七点、計三十二点を比較した。

第二節からは、奈良絵本・絵巻の絵を具体的に分析する。まずかぐや姫の表現に着目して考察する。かぐや姫の容姿について、奈良絵本・絵巻ではどのように描かれているか確認し、次に冒頭場面に描かれる子どもたちの意味について考察する。更に、先行研究も多い昇天場面のかぐや姫の描き方についても述べる。最後に、帝との対面場面の描かれ方を見ていく。現代の絵本における描き方などとも比較をし、かぐや姫の解釈について絵画表現から読み解いていく。

第三節では翁の表現について述べる。まず、物語の主人公としての翁の描かれ方を確認し、次に翁の服装について考察する。最後に、武器を持ち戦おうとする翁の描かれ方について述べる。物語本文では翁ではなく姫が対応した場面も翁が描かれるケースがあることなどを確認し、主人公としての翁の解釈について考察する。また、竹の中の黄金が絵画化されず、姫の服装に変化が見られるのに対して翁の服装に変化が見られないケースが少なからずあること、一方でかぐや姫の昇天場面で武器を持つ翁の姿が描かれることから、お金よりも我が子を重視する翁の姿を読み取る。

第四節では、求婚者の表現について述べる。それぞれ、物語において登場する順番で、石作皇子から石上麿足のエピソードまで、その特徴をみていく。チェスター・ビーティー・ライブラリー所蔵絵巻の求婚譚についての先行研究を踏まえながら、他の絵巻・絵本の求婚譚の表現について考察する。絵画表現を通して、求婚者たちにどのような眼差しが向けられていたのかを分析する。物語本文において、求婚者たちのエピソードが、難題への取り組み方が非誠実なものから誠実なものへと並べられているのと同様に、絵画の表現においても一律に諷刺の対象になっているわけではなく、グラデーションを見て取ることができる。これは子ども向けの絵本など、現代の絵画表現とは大きく異なる特徴である。

第五章

最後に、第五章では現代の受容について述べる。『竹取物語』は「かぐや姫」として、現代人にとって身近な作品である。第一節では、現代版の「かぐや姫」について、主に子ども向けの絵本を例として、どのような特徴があるかまとめる。まず、かぐや姫の描かれ方について、原作『竹取物語』との差異を確認しながら述べる。次に、翁の描かれ方についても、どのように変わっているか考察する。最後に、現代版「かぐや姫」のエッセンスとはどのようなものであるかについて、アニメーションや漫画の例も取り上げながら考察する。現代版の絵本には、月の人と人間との対比は描かれず、かぐや姫ははじめから感情豊かな、素直で明るい女の子として描かれる。一方翁はその題名からもわかるように、主人公としての位置づけにはなく、ただかぐや姫を発見した人の良い老人となっている。親子関係という点でも、現代版においては翁よりも姪とかぐや姫との関係の方が密接に描かれることが多い。そして、奈良絵本・絵巻では強調されていなかった翁が裕福になったという事実が、竹から溢れ出る黄金の絵画化によって強調されるのである。かぐや姫は最初から人間の心を持ち、当然心を失うことなく月へ帰って行く。心の獲得と喪失は現代版には描かれなないといえる。

第二節では、こうした現代版「かぐや姫」のルーツであると考えられる国定国語教科書の「かぐやひめ」について考察する。まず国定教科書がどのような経緯で作られたのか概観し、国定教科書に採録された「かぐやひめ」にどのような思想的背景があるかについて考察する。そして、最後に、国定教科書の「かぐやひめ」がいかに関現代版のルーツといえるかを確認する。現代版「かぐや姫」に頻繁に登場する「ご恩は一生忘れません」というかぐや姫の台詞のルーツが国定国語教科書の「かぐやひめ」にあるのではないかと考察し、その他省略される箇所などについても、現代版のルーツと言える点をまとめる。

次に、第三節ではジブリ映画「かぐや姫の物語」について述べる。2011年に公開された高畑勲監督作品の「かぐや姫の物語」は、興行収入こそふるわなかったものの、海外にも発

信され、国内でも『竹取物語』の映画化として注目された。高畑はこの映画を原作に忠実に作ったと述べているが、実際には忠実であるとはいえず、原作とは異なる特徴が多々ある。あまりにオリジナルの要素が多いため、まずは映画「かぐや姫の物語」の内容について確認する。次に、映画における翁の役割について述べる。そして、求婚者・帝の役割について述べ、最後に映画においてかぐや姫がどのようなキャラクターとして描かれているか考察する。まとめとして「かぐや姫の物語」が「悲しい物語」であること、一方原作『竹取物語』は「悲しい物語」ではないことを確認する。「かぐや姫の物語」は2017年11月10日にアメリカの映画サイト IndieWire の「最も悲しい 21 世紀の映画 20 本」(The 20 Saddest Movies of the 21st Century) に選ばれた。映画においてかぐや姫は自らの望む人生を生きることができず、翁の望む「高貴の姫君になる」という幸せが、かぐや姫にとっては幸せではなく窮屈であり、彼女は子ども時代を一緒に過ごした捨丸、あるいは山の自然自体に憧れを持ち続ける。帝に背後から抱きすくめられて、かぐや姫は思わず帰りたいと心の中で叫んでしまう。その結果、月から迎えが来るという展開になっている。映画ではかぐや姫の子ども時代が丁寧に描かれ、野山を駆け回る、感情豊かな女の子としてかぐや姫が描かれる。「かぐや姫の物語」もまた、心の獲得と喪失が描かれず、現代版の特徴を受け継いだ作品であることがわかる。

第四節では、現代の『竹取物語』受容の今後について考察する。まずは教育の中の、教材としての『竹取物語』について、現状どのように扱われているかについて述べる。そして、「受験古典」と言われる受験のための古典教育について、その問題点を述べ、古典教育のあり方について考察する。最後に、『竹取物語』をもとにした現代の創作の例として、漫画『あなたがいたら』と『月光条例』を取り上げ、『竹取物語』をもとにした新たな創作の可能性について述べる。また、パロディ的な作品として、登場人物全てを蛙で描く絵本『かえるの竹取ものがたり』を取り上げ、創作やパロディ作品の中で『竹取物語』の主題は生き続けているということを確認する。

終章

本論文の目的は、『竹取物語』がいかに物語の出発点と言える作品であるかについて確認し、それが今日までどのように受け継がれてきたかを見た上で、現代の受容について述べることで、『竹取物語』の現代における意義を確認することであった。

第一章では表現の面から、かな文字の表現力などを中心に『竹取物語』がいかに虚構のレベルが高いテキストであるか、いかにフィクションの出発点と呼び得るかを考察した。第二章では内容の面について、その主題から『竹取物語』を日本最古の生死論ととらえて、物語の意義についてまとめた。第三章からは受容について述べた。第三章では文字テキストにおいて『竹取物語』がいかに受け継がれてきたか、物語文学・説話の両方について見てきた。第四章では、奈良絵本・絵巻を取り上げ、絵画表現を通して『竹取物語』受容について考察した。最後に、第五章では現代の受容について、現代版の「かぐや姫」が主流であることを確認した上で、創作やパロディ作品の中の受容も踏まえて今後の可能性について述べた。

『竹取物語』を全く知らない日本人は、いないかもしれない。少なくとも「かぐや姫」と言えばどこかで聞いたことがあるはずである。最も有名で、多くの人がその内容を知った気になっている物語なのである。しかし、その内容を、主題を知っている人は極めて少ない。国定教科書から受け継がれる「かぐや姫」のイメージが強く、ジブリ映画「かぐや姫の物語」のような作品を『竹取物語』に忠実なものと思っている人も多いのが現状である。美しい女性が月に帰る物語、現代の「かぐや姫」は、言ってみればそれだけである。『竹取物語』は、心を持たない月の人が地上で暮らす間に人間の心を獲得し、それを失って帰っていく物語である。心を失う前に、言葉を書き残そうとする。「遅し」という月の人に、あなたたちにはわからないことだと言って手紙を、思いを残す。しかし羽衣を着た途端、全てを失くして帰ってしまうのである。人間は心を持つからこそ人間であり、心を持つから死ぬのだという『竹取物語』の主題は、現代では見えなくなっている。かぐや姫が聞き分けのよい素直なかわいらしい女の子として描かれても、翁がつまらない老人として描かれても、竹から黄金が

溢れても、『竹取物語』の価値は変わらない。損をしているのは、我々現代人である。しかし実際には、人間とは何か、なぜ人間は死ぬのか、それを「心」と「美」を通して描いた『竹取物語』は、現代人の心にこそ必要な物語なのである。